



21世紀におけるインディーズ雑誌

Media Groove

最近 インディーズ活動をしている方々のページを覗く機会が多くなった。もちろん 私自身がこのような立場にあることに加えそのような活動がインターネットの普及により身近な存在になりつつあるのだと感じている。

そんななかで 前回は音楽活動を行っているグループに取材を行ったが 今回は Media Groove にコラムリストとして「」投稿いただいた「」の Kook's HIGH HAT に視点を置いて取材をした。Kook's HIGH HAT は インターネット (<http://kooks-highhat.com/>) オンラインデザイン の シヤンの販売を行っている。シヤンの販売というおもしろい発想に興味を非常に引かれてメールで質問とその回答をやり取りして取材を行った。つまり今回は一度も彼とは顔をあわせていないわけだが、これらの インディーズ像を探っていくには、必要だと考えている。そのような意味でも 今回は面白い取材である。

ここでは かなり多くの インディーズの方を紹介していきたいと思っっている。今回の音楽系だけではなく 小説やコミックなどの制作者でも インディーズであれば 是非とも紹介したい 興味のある方は 後の方を見て欲しい。

21世紀のグループ像

一片の制作者たち

取材:相沢
レイアウト:本田

まず、シャツを販売するという活動について初めて聴く方には良くわからないのではないかと思います。どの様に活動(制作・販売)しているのかなど簡単な紹介をお願いします。ネットを中心にいくつかの店舗で販売させていただいている。ひとつひとつの、シャツはデザインはもちろんインクの色にまでとことんこだわった完全家内制手工業。つまりココロを込めた手づくり。僕らはいつもスピリットそのものをデザインにしている。だから一見、反抗的にみえたり悪い冗談だったりもする。これは、困いのなかで生きようとするオトナたちへの皮肉なのだ。

この活動をはじめたきっかけは何ですか？

「インパクトのない生き方はしたくない！」見た人が驚いちゃうような、すごい個性をぶちまけながら生きたい！」っていう単純なフラストレーションだけがきっかけ。

シャツという素材だと他にもそういうサービスがあると思いますが、なぜ自分で制作するのでしょうか？

ポディアートにはいろんな種類がある。タトゥーはポディアートの王様の

存在で、色彩・デザイン、文字を駆使するから万能で、まるで絵画のように奥が深い。ただし、タトゥーを消すのは容易ではないから、そこに彫るメッセージはその人が一生背負っていく。こう思うほどの、大きな決意や信念など、深刻になってしまふケースが多い。ポディピアスも部位によって強烈なメッセージを持つ。ワイルドさの表現だったり、セックスアピールだったりする。本気というのはすごい。タトゥーとポディピアスは、それをしてる人を見たときにかゝる、すごい!!と無条件に思わせてしまうパワーを持っていると思うのだ。

ポディアートは常に何かを伝えようとしている。アイデンティティを主張している。ファッションの延長線上にあるように見えるけど、もっと別のヌピリチュアルなオリジンが産み出したものなのだ。さすがにこれには敵いっこないけど、多かれ少なかれ、みんな少しずつ自分の体をデザインしている。例えばあなたも、ヘアマニキュアをしていないだろうか？話すことや行動することと同じ、ポディアートは重要なメッセージツールといえる。

話す・書く・歌う・演奏するっていうのもある。これらは直球なのである。刹那的だからこそ起(こ)り(お)つ(と)る「奇跡」

という名の感動だ。音はその場に留まってくれないし、本は閉じてしまえば表紙しか見えない。

録音すればいいじゃん？違うんだ。録音した音は、聞かなくて意味を持たないし、もう一度ページをめくらなきゃ話にならない。いうまでもなく、これは人類史上もっとも注目すべき文化であり、最高のアートであり、最強のメッセージツールだ。ただ、せつないほどに刹那的なのだ。

だから僕らは探し始めた。スピリチュアルでポップで刹那的でなくて、個人的でタトゥーの迫力があるものを。世の中で売られている服は、僕たちをカテゴリ分けしていく。洗練、スポーティ、ボーイッシュ、フェミニン……でも僕らはカテゴリ主張に興味はない。大切なのは個人である。

さて、僕がたどり着いたもの。シャツ。途中で縫い目も編み目もない。キャンバスだ。一番素肌に近いものこそ、个性的であり、一番シンプルなものこそ、印象的だ。そして、「ポップでなきゃ」「強くなきゃ」との2つだけを考えて、僕らは、シャツを作っている。そう、シャツのデザインは、メッセージこそが全てを征する。



「シャツのデザインを思いつくき
っかけはありますか？」
必然なはずなんだけどわかりませ
ん。

デザインのオリジナリティを追求
している部分がありますか？

デザインそのものが持つときにア
イロニツクなメッセージ性。

それらデザイン面で影響を受け
た人や物などありますか？

ブランドコンセプト、パンクにつ
きるよな一もろろん基本的には音楽
スタイルとしてのパンクを指している
わけじゃないすべての人の心の根底
に流れる姿勢のことだ。僕らはパンク
とはシステムチックに均一化した世
界に厳然と存在するはずの何かを取
り戻すアティチュードのことだと思っ
ている。

キーワードは「反抗」。

物語は昔アメリカで知らないうちに
リリースされたいた「ノニニューヨ
ク」というアルバムにまでさかのぼる。
もちろん極東ニッポンに住んでいた僕
らのところに当時その音が届くこと
はなかったし たぶん聴いてもコードモ
の僕らにはわからなかっただろう。で
も、今にして思えばこのアルバムはただ
のじゃなかった。

表現欲のなせるワザとしか言いよう
のない奇跡が産み落としたアルバム
だからだ。この奇跡の親たちはやりた
いことをやりたいように表現しただけ
なんだろうが 簡単なようにも聞こえ
るの やりたいことをやるうていう
言葉の真意は 本当にそんなに単純な
んだらうか？ ことからパンクの本當
の意味を知るための旅がはじまった。
僕は、MTを見ているうちにプロモ
ーションの華やかな例えばブリティッ
シュバンドってなんか変だと思いはじめ
、アンダーグラウンドへ傾倒し まさに
ワインディングロードをくねくねうる
うるしながらパンクが再び燃焼する
瞬間を待っていた。

そしてつい一九九九年夏 僕にとっ
ても世界中にとっても 運命のアルバ
ム スメルズライクティーンスピリッ

トがリリースされた。

メジャー（ニルヴァーナはゲフィン
に移籍）からでたアルバムにしては飛
び抜けてスリージーなサウンドだった。
そう 再びパンクは爆発したんだ 荒削
り以前の作品に比べると面白いくら
いに洗練されていたが、衝動的で、
絶望的なそのサウンドはまさにシス
テムチックな音楽業界に波紋を投げか
ける一石パンクだったのである。

チャンスというものは準備ができ
ている人にだけおとずれる 僕は長年
待っていたおかげで、パンクと聞い
て元気になるチャンスをちゃんとつ
かまえた。

パンクに生きるには勇気がいる。そ
してすべての反抗には理由がなけれ
ばならない。僕は常に何かに反抗し
ながら生きてるし、僕は僕らの生き
方に自信を持つてる。パンクな生き方
は僕らを自由に、そして強くしてくれ
る。

おかげで僕らのパンクぶりに磨きか
かり心身ともに世の中の普通と
されているほとんどのヤツに比べて、
健康で正常で、そして自由だ。

クークズハイハットの原点はここ。
流行語としてのグランジは終わっても、
次のシーンの扉をたたくアティチュ
ードは消えることがない！

では最後に将来こんなものを作っ
てみたい！という意気込み 今後の活動
予定などをどうぞ？

HPで「さすがにこれは自主発禁」
となった作品を紹介していくのもおも
しろいと思ってます。

ご協力ありがとうございました。

これは私が送りつけた質問に対する彼
からの答えである 私はこの文に一切
手を加えず このページに載せた。そ
から彼の活動に対する思いが伝わって
くる。

さて私は一番重要なことを忘れていた。
KOOK'S HGH Eの意匠である。それ
は彼の一番最初のページに書いてあ
ったあなたも是非その意味を、自分の意
志で確かめて欲しい。

この一片の制作者たちは多くの方を紹
介していきたく思っている。投稿作品
はこの後の「コーナー Independent Works
で紹介している。このような活動を通し
てインディーズを広めていきたいと考
えている。実際これはインディーズの
活動を広める一つの手段にしかならな
いが、大きな手段になるように努力して
いきたいと考えているので、興味のある
方は以下のページにアクセスして欲し
い。

Media Groove

<http://www.R7project.net/MG/>



Media Groove / 一片の制作者たち

前提とした生前を死と

hiyou

前回では飛ばしすぎましたね。もつとゆつくりと語るべき事の方がいいですね。

まあ、初回の

「表題について考えて下さい」

と書いても何の事やら分かりませんよね。

簡単に一部だけ説明しますと、非常にシンプルなんで、まず、この思想について簡単に書きます。

産まれる環境、その後の人生。これは不平等ですよ。選べませんから。

生きるということは、苦しいときが多いよね。もし、神様あるいはそれらしい存在があるのならば、「死」はみんなに平等に与えられている「愛」だと思つのです。いつ死ぬか分からないならば、その日を生きたられるお金で充分だと思えます。余った分は必要な人に分け与える。

後悔して死にたくないよね。だから、出来る限り優しく生きよう。頭はクールでハートは熱くと。述べるべき事は沢山ありますが今回はこの程度で。

「最強のドラッグ＝金」

インドの貧民街では、幼い子供達が埃まみれの工場で働かされ、幼いうちに肺を痛めて死んでしまう。もつと酷いのは、自分の子供の手足を切断し、観光客の見せ物として扱っている。

最強のドラッグ「金」に犯され、心が荒み腐っていく。

しかし、その背景には、必ず国家の無策があります。どこの国でも政治家は、腐っている。典型的なのは日本。政治家が数億、数十億円のような罪を犯しても、金さえ払えば仮釈放と言う名目で、その政治家は釈放され、のんきな生活に戻る。

片方で、100万〜一千万円の借金で心を痛め自殺する人がいる。

アンフェアだ。平等ではない。

世の中は全て「金」で動いている。

僕は、幸か不幸か社会の裏まで知っている。事務所の命令で90%嘘の自己破産の書類を作

ったことがある。良心が痛む。

あらゆる裁判は要するに全て「金」。

金のことを深く考えてごらん。ノイローゼになっちゃつよ。

元気もなくなるさ。

こんなしみつたれた国は日本ぐらいだよ。

「元気があればなんでもできる！」と僕の心の師匠アントニオ猪木さんが言ってるよ。まさにその通り！

貧しくとも、元気で愛に溢れた環境で育った子供達はタフだし優しいよ。

生きていること、両親への感謝の気持ちで、ハングリーになって心はもっと強くなる。

日本はおかしな国なんだよ。家族の絆がこれだけ重要視されない国は日本だけ。

ハリウッド映画には、必ず家庭の問題が取り上げられている。陳腐な映画が多いけど、家族の絆は必ずと言っていいほど取り上げられている。

だからって、一時の村上龍氏みたいに、父権がどうのこうのって言ってる訳じゃない。

日本には「元気」も足りないし「笑顔」も足りない。

なんか、せせこましいよ。

愛して結婚し愛する子供が産まれたら、「会社」や「仕事」の前にまず家族を大事にする心が大切だと思う。

あした、もしかしたら家族の一人が死んでしまいかもしれない。だから、夕食ぐらいはいろんな感謝の気持ちを含めてみんなで「いただきます」というのがいかに大切であるか。

いろんな事を考えて欲しい。

差別もいけない。肌の色や過去の血筋を調べて卑しいだとか、そんなのクソ喰らえだ。

俺達、1970年代産まれ俺達が積極的にものを考え、後世のための輝く道を開拓していかなければならない。

俺達の上司連中は短いスパンでしか世界を考えていない。

俺達は、馬鹿な上司連中等無視して長期的な考え、思想を育み後世に、新しい思想を理解してもらおう。

今回は「死を前提としての共生」+「自己の解放」について語りたいたいと思っておりますが、なにぶん時間がないもので、どうなる事やら分かりません。

しかし、「死を前提としての共生」+「自己の解放」の思想は僕の思想の根本にあるものです。矛盾してるんじゃないの？と思う方、実に頭が良い！

さて、次回、お楽しみにして下さい。

僕も、自分で何を書くのかワクワクしますが、思想なんてものは一円にもなりません、同調した同志が集まれば、金よりもっと大きなものが手に入られると信じています。

色々なことを考えましょう。色々な角度で。

<http://www.amy.hi-ho.ne.jp/hiyou/>

僕の作品が読めます。

<http://www4.freeweb.ne.jp/computer/hiba/>

懸賞、公募、SOHO、ネットビジネス等情報満載です。

ONE SCENE'S STORY no_01

「銀色の舞台」

writing by ATS

「第一章」

瑞葉（みずは）が事故によって視力を失ったのは、そう、すべての音を消し去ろうとする様な雪の花びらが舞い散る寒い冬の夜だった。

「わぁ〜キレー」

瑞葉はロングのフレアに革のブーツと言った格好にも関わらず、東京にしては珍しく積る程の雪に、年の事も忘れてはしゃいでいた。

「瑞葉。そんなにはしゃいでいると・・・」

と、俺が言い終わらないうちに

「ドスン！」と言う鈍い音と共に瑞葉が足を滑らせて尻餅を付いていた

「いっつ、痛ぁ〜」

「あはははははははははは」

「っつ、何もそんなに笑わなくてもいいじゃない!」

瑞葉はふくれっついで

「ほら涼。レディーには優しくするてーのが男のつとめでしょ」と、手を差し出す。

「ええ？何処にレディーがいるって？」

俺はそんな瑞葉の言葉に少々とぼけて見せる。

「言ったわねえ」

それから俺達は、夕闇のカーテンが昼と夜の世界を分けようとする頃まで、いつもと少し違う東京の町を楽しんでから別れた。

それにしても、いくら雪の降らない地方で育ったからって良くもまああんなに楽しそうにはしゃげるよ……

少し前に聞いた話では、瑞葉は九州の雪の降らないところで育ったらしく、10歳の時に初めて雪を見た時には相当に感動したらしい。なにせ、普段は信じもしない神様が、自分の為に白い花びらを舞い降らせて銀色の舞台を作り上げてくれてるんだと本気で思ったらしい。

その事を

「なんともまあ、乙女チックな事で」とからかう

「だって、乙女だもの」

と、澄ました顔で答えるのだった。

ちなみに、瑞葉がクラシックバレエを始めたきっかけは、この銀色の舞台によるものらしい。

がしかし、その話には続きがある

その銀色の舞台上で1時間位ボーっと口を開けたまま立ち続けていた瑞葉は、その日ひどい熱を出して寝込んだらしい。

俺はそんな話を聞いて、いかにも瑞穂らしい話だと思った。

ボーっとしてる所とか……ね

俺はそんなドジな瑞葉の事を考えながらアパートへと帰った。

そしてあの留守電を聞く事になる。

妙な事だが、あの日のあのメッセージを聞いた時の事が、今でも詳細に記憶に残っていた。

「おっと、留守電にメッセージが入ってるな」

貧乏な一人暮らしの学生に、無理矢理、留守番電話機能付きの電話を買わせたのは、同郷と言いつ事で知り合った同じ学科の先輩だった。

当初は電話なんてと思い、買わされてしまった感覚があったのだが、あればあったで意外と便利な物だった。

しかし、当然の如く貧乏生活を強いられる結果となり、どうやって食費を切りつめようかと真剣に悩んだ記憶がある。

「あの時は本当に辛かった」

しかし、意外と高機能でまとまった電話だったので、今では結構愛用している。

しかし、あの時は、そう、留守番電話のメッセージが入っている事を知らせる赤いランプが、今でも嫌な記憶として消えずに残っていた。

ピーッ

「ロクオン・ハ・二件デス」

機械的な音声が二件の伝言がある事を告げる。

一件目は同じゼミを受講していたやつからで、レポートがどうのとかのどうでも良いような内容だった。

そして、二件目のメッセージは、いつもはのんびりとした口調が特徴の瑞葉の母が、少々早口ぎみに用件だけを入れたものだった。

「あ、もしもし、涼君ですか？ 高科（瑞葉の名字「たかしな」）です。今日ね、瑞葉が交通事故に遭って、今の病院から・・・」

俺は留守電のメッセージを聞き終わると、上着を着るのもどかしいくらいに家を飛び出し、瑞穂が運ばれた病院へと駆け出していた。

外は、あれからずっと降り続いていた雪がつもりかけていた。

俺は、乱れた息も整わないまま、受け付けから瑞穂の居る病室を聞くとエレベーターに飛び乗った。

5階へ付くまでがひどくもどかしく感じられた事も覚えている。そして病室の前まで来た俺は、一度深呼吸をして気持ちを落ち着かせてからノックをした。

コン・コン

「はい」

個室の病室のドアが開き、最初に出てきたのは瑞葉の母だった。

電話の時よりも幾分落ち着きを取り戻したのか、俺の顔を見ると少し表情を緩ませながら話し出した。

「ごめんなさいね。突然電話で呼び出してしまって」

「いえそんな事は・・・」

「それよりも、瑞葉の具合はどうなんですか？」

俺は自分では気が付かなかったが、静かな病室に大きく響く程の声を出していたらしい。瑞葉の母親は少々声のトーンを落としながら説明してくれた

「ええ、車に轢かれたとは言ってもね、それ程スピードが出ていたわけでもなかったらしくて、体の方には骨折とかはなかったの・・・だけど・・・」

「ここで少し間を空けて、ベットで寝ている瑞葉に聞こえない様に、更に声をひそめて説明してくれた。

「ただね、今はちょっと視力の方が戻って無いらしいの。詳しくは検査してみないと解らないらしいんだけど、お医者様の話だと外傷らしいものが見当たらないらしくて、一時的なショックが原因による精神的な視力障害なんじゃないかって・・・」

「高科さんのお母さんですね。」

「はいそうです。」

瑞葉の母親は看護婦に呼ばれると、入院するのに色々な手続きがあるのか

「ごめんなさい涼君。ちょっと瑞葉の側に付いていてくれるかしら」と、言っただけで病室を後にした。

「りょう」

瑞葉の母親が出て行くと、痛々しく目を覆つように包帯をしてベットに寝ている瑞葉が俺を呼んだ。

瑞葉は俺がベットの横に置いてあった小さな椅子に腰掛けると、包帯が巻かれていて見えないながらも、こちらの方を向いて話し出した。

「・・・あははっ、私ってドジだからさあ、車に八ネられちゃった」
たぶん、俺に心配をかけたくなかったのか、それとも自分自身の平静も保ちたかったのか、努めて明るさを見せながらしゃべる。

かなり無理をしているな・・・

今は、それこそ事故の直後だけに色々と気が張っているから良いが、このまま視力が戻らないような事になったら・・・。それを思うと、俺は居たたまれなくなつて瑞葉の手を強く握りしめた。

「瑞葉・・・」

すると今までの緊張が一気に取れたのか、俺の手を強く握りかえすと胸に顔を埋め、肩を震わせながら声を押し殺すように泣き出した。

「わ、私、このまま視力が戻らなかつたら・・・」

このまま光を失ってしまうのではないかと言う不安が、瑞葉の心を押しつぶそうとしている。

「りょう・・・」

「大丈夫だよ瑞葉。事故のショックで、一時的に視力が戻らなくなっているだけさ」

「でも・・・でも」

「大丈夫、きっと見える様になるぞ」

気休めだと解っていたが、今の俺にはこう言つて瑞葉を安心させる事しか出来なかつた。

しかし、この後一年を過ぎようとしても瑞葉の目に視力が戻る事はなかつた・・・

- a year after -

あのあと瑞葉は検査の為に一週間ほど入院したのだが、視力が戻らない以外は大した外傷も無かつたので、まもなく退院して自宅に戻る事になった。医者の話によれば、頭部の外傷はまったく認められない状態で、事故による精神的なショックが引き金となつた視神経障害だろうと言う事だつた。

「この先、突然視力が戻る事も、一生戻らない可能性もあります」と、担当医は淡々と説明を続ける。

「これは少し珍しいケースでして、本人が一生このまま視力が戻らないのではないかと言う、恐怖心や脅迫観念なども視力の回復を妨げているのではないかと考えられます。治療と言うものはありません。後は、患者本人の心の問題です」

この日以来、瑞葉の顔からひとつづつ表情が消えるのが、どうする事も出来ない俺にとっても辛い日々になった。

「瑞葉、今日はさ、こんな季節には珍しい綺麗な花を店先で見付けて買って来たんだ」

あれから俺は、出来るだけ瑞葉が興味を持ちそうなものを買ってきたり、話をする様になっていた。もちろん、瑞葉の「見たい」と言う気持ちを引き出す為だ。

「ははっ、花屋に男は俺一人だったから、ちょっと恥ずかしかったよ」

「視力は心因性のものと考えられます」

俺は医者言葉を信じ、少しでも瑞葉の「見たい」と言う気持ちを掻きたてれば、いつか視力が戻ると信じていた。このまま、瑞葉の瞳に俺の姿が映らない様な事には、絶対になんて欲しくなかったから。

しかし・・・

一年が過ぎようとしても瑞葉の瞳に視力が戻る事は無く、あれだけ表情豊かだった瑞葉の顔から、ひにひに感情が抜けていくのが誰の目にも明らかだった。

「……………」

「ほら、結構良い香りがするだろっ」

そう言いながら、買って来た淡い紫の花を瑞葉の顔へ近づけようとした。

「ヤメテ！」

突然、瑞葉は花束を払いのけると手で顔を覆いながら泣き出した。

「もう・・・やめて」

「無理なのよ、一年も視力が戻らなのよ」

「これからだって視力が戻る事なんて無いのよ」

目が見えない事のストレスがここにきて抑え切れなくなったのか、感情に任せるままに言い放つ瑞葉を見るのは、これが初めてだった。

しかし、そんな風に苦しむ姿を見ても、俺自身には瑞葉の持つ不安や絶望、ストレスと言った感情を理解しようとしても理解する事

は出来なかった。いや、瑞葉の事を心配する事は出来ても、瑞葉自身の持つ不安やストレスと言つものは、目の見える俺には理解出来ないと言つた方が正しいだろう。

いくら目の見えなくなった瑞葉の様に目をつぶって見ても、目を開ければ俺にはものを見る事が出来る・・・どうやっても、瑞葉の本当のこころを理解する事は出来ようが無い。

だけれども・・・

「何言ってるんだよ瑞葉」

「先生だって心因性だって言ってたじゃないか、これからだつて・・・」

「もつ・・・無理よ」

「私は一生暗闇の中で暮らさなくてはならないの」

「誰にも、光を失った私の気持ちなんか、理解できないのよ」

何かの悲劇のヒロインを思わせるかの様に自嘲ぎみな言葉をはく

瑞葉に

俺は

パン！

俺は瑞葉の頬を平手で叩いていた。

「ああ解らないさ」

俺の手は微かな震えが止まらなかった。

「どんなに考えたって、目が見える人間には理解できる訳がないさ。目の見えない人の不安や恐怖なんて言つものは・・・」

「だけど・・・」

「だけど俺だって、悲しい顔しか見せない瑞葉を見るのは、本当につらいんだ」

「瑞葉が悲しいなら、俺だって悲しい」

「瑞葉が不安なら、俺だって不安だよ・・・」

「逆に」

「瑞葉が楽しいなら、俺だって楽しいし、幸せなら、俺も幸せになるんだ」

「瑞葉が・・・」

瑞葉は、頬をたたかれたショックより、自分の事を本当に必要としてくれる人間がいるのが嬉しかったのか、大粒の涙を拭う事もし

ないで流し続けた。

私だけが全ての悲しみを、抱えていた訳じゃ無かったんだ。

私が悲しめば、隣で悲しんでくれる人がいる。

私が苦しめば、隣で心配してくれる人がいる。

逆に

私が笑えば、一緒に笑ってくれる人が・・・いる。

あの日以来、暗い表情でしか泣けなかった自分だけど、これからは泣いてはいても希望を感じる事が出来る。こんな境遇ではあっても、自分には涼がいてくれる

「・・・何で、忘れてたんだろう。私は一人じゃ無い事を……」

「そつさ、瑞葉は決して一人じゃない」

「どんな時でも瑞葉の側に居て、そして信じてる」

「何時かまた、俺の顔を見て笑ってくれるのを」

「うん……」

そして、涼と瑞葉はキツイくらいに抱きしめあいながら、二人の愛の深さを表すように、長く、そして涙まじりのキスをかわす。

季節は冬・・・

あの時と同じ様に、窓の外は厚く空を覆う雲が今にも真っ白な雪の花びらを舞わせようとしていた。

「瑞葉」

「ん？」

「雪が……」

しばらくの後、二人の事を祝福するかの様に振り出した雪は、本当に銀色の舞台を作り上げる、真っ白な雪の花びらだった。

「涼」

「ん？」

「まるで神様が、私達の為に銀色の舞台を用意してくれているみたいね」

Media Groove

Editor in Chief :

相沢 裕貴

Writer & Editor :

本田
鈴江 成美

Contributer :

Kook's HIGH HAT
hiyou
ATS

Other Stuff :

You

Published By

R7 project

URL :

<http://www.r7project.net/>

E-mail :

mg@r7.1r.net

本誌掲載の写真・イラストおよび記事の一部または全部の無断転載・翻訳などを禁止いたします。また、一部のみの再配布を禁じます。再配布は原本と同じ状態でのみ許可いたします。

Voice of Staff

大変遅くなっています。申し訳無く感じております。やはり年度末というのは、皆さん忙しいもので、編集がなかなか進まず、やっと発行できました。MediaGrooveは途中でやめてしまつつもりはありません。しかし、発行の形態的に新しい試みである。このために、このようなご迷惑をおかけするかもしれない。どうか未永く、このMediaGrooveを応援して下さい。

では、今号の制作にかかわったスタッフから一言。内は担当です。

相沢裕貴 (Chief) : 本日に遅れてしまつて、申し訳ありません。なんとか制作の過程を確立したいのですが、さすがに皆さん不安定で、予定通りにはいきません。ですがこれからもう少しお願いたします。

鈴江成美 (Editor) : 先日歯医者

に行った時の事、わたの麻酔をされたらとってもいい香りがして寝てしまった。先生の「大丈夫ですか？」の声で起きたんだけど、思わず

「これって睡眠薬何か含まれてますか？」と聞いたところ、「かなりお疲れなんです」と言われてしまった。そう、今月は決算月ということもあって忙しかった。んーでも春だからかなあ。毎年インフルエンザにかかつてしまうので、先日ワクチン注射を受けました。さあこれで一安心と思つた矢先に「グラツ・・・」あれれ、これってもしかして風邪?と思つていたらワクチン注射の後って2、3日は熱がでるんだって。皆さんも風邪には気を付けて下さいね。

本田 (Editor) :
遅れてすんまへん!!!
廊下に立っています!!!

「Media Groove」では編集スタッフやライター、投稿者を募集しております。最近DTPをはじめめたばかりで腕には自身がないという方でも大歓迎。私たちも素人ですので一緒に勉強しながら腕を磨いていきたいと思っております。興味のある方は左記までご連絡下さい。お待ちしております。